

伊能忠敬

千葉県の誇る奇跡の人
(佐原・九十九里町)



(1) 伊能忠敬と「佐原」

千葉県が生んだ偉人、伊能忠敬といえば、水く「佐原」というイメージがあつた。ところが、平成の大合併によって、佐原市と香取郡の「山田町」「栗源町」「小見川町」が統合されて「香取市」になつたため、現在は「香取の伊能忠敬」というイメージに変わりつつある。

佐原ともちろん古く由来ある地名だが、市名として「佐原」が消えてしまうことは何とも悲しい。「小江戸」と呼ばれている。埼玉県の「川越」も小江戸として有名だが、その趣を残しているはやはり佐原である。小野川沿いの建造物群はやや観光用に整備された感じだが、すごいと思うのは日常に使用している店舗などが昔のままの面影を残していることである。景観としては小野川沿いよりもはるかに迫力がある。

小野川沿いの中心地には伊能忠敬の記念館があり、その反対岸には伊能忠敬の旧宅がそのまま残されているので、やはり伊能忠敬といえば佐原ということになる。この旧宅は伊能忠敬自身が設計したものといわれる。ところが、伊能忠敬が生まれたのは、この佐原ではなく、実は九十九里町なのである。

(2) 生い立ち

伊能忠敬は延享2年(1745)、上総国山辺郡小関村に生まれた。現在の山武郡九十九里町小関である。ちょうど九十九里浜の真ん中といったところである。生家は小関村の名主の小関家で、父は小関貞恒、忠敬の幼名は三次郎といった。兄と姉がいる三番目の息子であった。幼少時は決して恵まれた環境ではなかったらしい。六歳の時に母を亡くし、小関家に嫁入りしていた父は離婚され、上総国武射郡小堤村の実家に帰ったが、三治郎はそのまま小関家に残されたという。その後三治郎が一〇歳になった時、父の実家に迎えられ、小堤村で過ごすが、三治郎は一七歳の時伊能家に嫁入りすることになり、佐原に移ることになる。

一九九九年平野の田んぼが広がる一角に「伊能忠敬記念公園」はあつた。千葉県指定史跡となつていて。看板には「たまたま、小関家は漁業を經營していたので小関家納屋番として起居し三次郎苦境の少年時代であった」と書いてある。

忠敬に関する本を見ても、幼少時の記録はほとんどなく、苦しい境遇を生きたという書き方が大半を占めている。公園の一角には測量機の脇で天球を指さしている像が建てられている。

その後、伊能忠敬が商人として活躍するも、四九歳にして長男に家督を譲り、寛政七年(1795)には江戸深川に出て、一九歳年下の高橋至時に弟子入りし、さらに寛政二年(1800)から文化一三年(1816)に至るまで全国測量を続け、当時における最高精度の日本地図を完成することに大きく貢献したことは周知のことである。

(3) 「子午線一度の偉業」

私が注目したのは、伊能忠敬記念公園の碑の後ろに刻まれた次の二節だった。

「先生は、内外圧による封建制の崩壊直前という激動の時代を背景に、幼少の頃から志を立てて幾多の困難を克服し、農業・商業にわたつてすぐれた社会貢献を重ねた。晩年、文化十三年(1816)まで約十六年間、天測地土測を兼ねた独創的な方法によって、日本全土の測量を推進した。なかでも天測による子午線一度の算出は、世界土木技術史上はじめての偉業として異彩を放つ」

「先生」の偉業を称える全体の文章のタイトルが「子午線一度の偉業」であつたことにまず目を惹かれた。どうやら、この「子午線一度」がどのくらいの距離になるかを測定することが重要と考え、それが全国の測量に広がつたということらしい。

忠敬は江戸では深川の富岡八幡宮近くの黒江町に住んでおり、そこから約九キロ北の曆局まで通っていた。当時はこの二つの地点の緯度の差が「一分半」ということがわかつていたので、そこから計算して一度の距離を測定しようとしたのである。そこで、忠敬は歩測でその距離を測り計算しようとしながら、その程度の距離では一度の距離は出せないと高橋至時に言われ、蝦夷自宅から曆局まで歩測で作成した地図が残つており、現在国宝となつてゐることで、やは

り並ではないと痛感させられる。

伊能忠敬とそのグループは都合一〇回の測量で日本列島の地図を完成させることになるのだが、第三次の奥羽・羽越測量までの成果から、子午線一度の距離を二八・二里を算出し、それが二八・二里、つまり約一一キロであることを突き止めたということである。

(4) なぜこれまでの偉業にチャレンジしたのか?

しかし、それにしてもおそらく当時の平均寿命は四〇歳の半ばであった時代のこと。その時代に五〇歳を超えてから天文學をはじめとした自然科学を学び、イギリス人さえも驚嘆させたという日本全国を完成の域にまで持つていったというのは、まさに奇跡そのものであると言つてよい。

なぜこのようないくつかの偉業にチャレンジしたかについては、それを示す確たる資料は存在しない。たゞ、晩年、忠敬六九歳の時娘の妙薰(長女)、出家して「妙薰」と号した)に宛てた書状にはおよそ、次のようなことが書かれている。

——私は幼年より高名出世を望んでいたが、親の命令によつて佐原へ養子に入り、好きな学問もやめて、商業を第一として生きてきた。伊能家の先祖の格言を守り、遂には多くの人々も救い、功なり名を挙げて隠居の身となり、江戸に出てから日本全国の測量を申しつけられ、諸侯大名の御とりなしもあって実にありがたいことである。これぞまさに天命と言つていいだらう……。

これを見ると、幼少の頃からよほど学問が好きだったと推測される。伊能忠敬が作成した地図は伊能図と呼ばれるが、伊能図は明治に入つてから近代日本を築くための基本図として活用され、国際的にも高く評価された。

伊能忠敬は決して天才と呼べるような人物ではなかつた。商人としてその生涯を賭けたのだが、さらにその後人生の後半生を日本地図に命を賭けたのであった。その功績は日本史上燐然とした輝きを放つている。千葉県の誇る偉人である。

千葉地名の由来を歩く 谷川彰英

KKベストセラーズ



▲伊能忠敬の旧宅



▲佐原の街並み

谷川彰英
1945年長野県松本市生まれ。
ノンフィクション作家、東京教育大学(現筑波大学)卒、同大学院博士課程修了。柳田國男研究で千葉大学の学位(筑波大学)を取得。たどり名を活用した授業を開発したことが、ライフルワークとならぬた。筑波大学教授、理事、副学長を歴任するも、退職と同時にノンフィクション作家に転身し、第二の人生を歩む。テレビラジオなどでも活躍。日本地名研究所所長を歴任。現在、編集部、筑波大学名誉教授。著書に地名の由来を歩む、「都道府県地名」、「米科丸出」、「国武将はなぜその地名だったのか?」、「朝日新書」など多数。